

コラム

「八つあたり その2」にあたる

本誌第75巻第3号に掲載された表記コラムの、日米研究者のオリジナリティを論文著者数で比較するという、オリジナリティのある評論を面白く拝読しました。私自身、オリジナリティという言葉には敏感な方で、常々、オリジナリティのある研究を心がけているつもりです。

ただ、Metallurgical Transactions は純粋な学術誌であるのに対し、「鉄と鋼」は学術誌+技術誌的な性格を持っているため、直接の比較はいかなものかと感じます。先生のご批判が、主に、大学の研究者に向けられているように拝察しましたので、先生が示された1987年の本誌の論文著者数の分布を、大学、企業、官公庁別に分けて、付図にまとめてみました。ここに拾いましたのは、論文と技術報告だけで、解説等は除きましたので、先生の作られた表と、総数は若干異なっております。この表で大学分を見ますと、著者数4名以上の論文は41%、平均著者数は3.3名となり、先生の出された統計よりは、多少、ましな結果となっております。それでも、米国の2.5人(1987年)と比較すれば、著者数の多いことは確かです。しかし、それが、直ちに、オリジナリティのなさに結びつくとは考えておりません。

著者数は、オリジナリティのほかにも、種々の要因で決まると思われます。実は、付図の統計には私の論文も二つ入っておりますが、著者数は4名と5名です。これらの研究は、大がかりな実験を要したので、数年に渡り複数の学生君がやってくれた結果をまとめたために、著者数が増えた次第です。

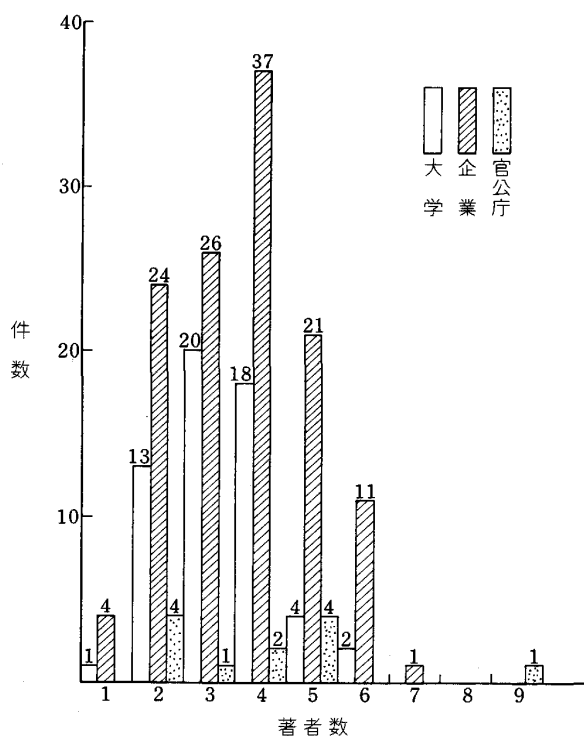
もう一つ重要なことは、研究費を誰が稼ぐかということです。助手や助教授に年間支給される文部省の經常校費は、たかがしれています。一方、科研費にしる、企業からの研究費にしる、いくらオリジナリティのあるアイデアであっても、実績の少ない若者には回ってこないのが日本の社会システムではないでしょうか。(それでいいと言っているのではなく、むしろ、若い時には大いに苦労しました。)そこは米国と大きく違うところのように感じています。彼の国では、Ph. D. をとりたての研究者にも、プロポーザル次第で、比較的十分な研究費が、5年間ぐらひは、NSFから出るやに承っております。その間に然るべき成果を上げることによって、一人前の研究者になっていくということのようです。日本では、若いうちはアイデアはあるけど研究費はない。歳をとれば、研究費はあるけど新しいアイデアは出てこない。もちろん、年配になられてからも新しいアイデアで、バリバリ、オリジナリティのあるご研究をされている先生方もいらっしゃいますが、大勢は上記のようなことではないでしょうか。そして、若手研究者と年配の教授が持ち

つ持たれつで、うまくやっていくというのが日本の大学の研究の進め方のように感じています。

10数年前にスウェーデン王立工科大学に留学しました。その教授はいろいろな所から研究費を集めてきて、我々に研究をさせて下さったのですが、研究内容に貢献していないと判断されると、著者には入られませんでした。それは、純粋に研究のオリジナリティを尊重されたためと考え、尊敬しております。しかし、いざ、自分がそのような立場になった時、「研究費は出すけど、著者に名前はのせるな」と言えるかどうか自信がありません。もっとも、その先生の場合、スウェーデン王立工科大学から鉄鋼製錬に関する研究論文が発表されれば、その先生が関与されていることは、世界中の周知の事実ということはありません。以上、いろいろ書きましたが、論文の著者数とは、単に、オリジナリティだけでなく、研究者を取り巻く環境をも反映するものだと考えています。そして、論文のオリジナリティが誰にあるかということは、著者の順序や過去の実績などによって、賢明な読者には自明のことと思っております。

最後に、企業から提出されている技術報告には、多数著者のものが多く、平均著者数は4.1名となっております。しかし、新しい研究成果を工業的技術とするには、多くの人の協力が必要なので、これはいたしかたないことと思います。

(豊橋技術科学大学 川上正博)



付図 「鉄と鋼」1987年における論文著者数の分布内分け